

『源氏物語』伺候者体系論 - 「世に従ふ」男性伺候者 / 「まかで散る」女性伺候者の葛藤

著者	池田 大輔
雑誌名	紀要
号	21
ページ	35-46
発行年	2019-03-20
URL	http://doi.org/10.32125/00000032

【抄録】『源氏物語』の伺候者と主人という繋がりが、どのようなことばによって構築されているのかを明らかにする。そして、その繋がりの間にあるもの、繋がりの脆さ、そこに生じる葛藤の内実を明らかにすることが目的である。受領層を現実社会の取り込みだけではなく、物語の問題として伺候者と主人との関係を伺候者から読み解く。

【キーワード】 男性伺候者、女性伺候者、受領層、世情、私情

はじめに

『源氏物語』は、桐壺更衣の苦悩から始まり浮舟、薫の苦悩で終わる。作中人物たちは、いったい誰が最も幸せだったのかと考えさせられるくらい、多くの人物たちの苦悩と葛藤が語られている。それらは、恋愛・政治・血筋・身分など様々な人物関係から生じる。他者と関係を持ち、それを保つ、断つことに苦心する。それは、物語の中心人物たちだけではなく、端役である伺候者たちも例外ではない⁽¹⁾。伺候者と主人との間にある繋がりは、どのようなことばで語られ、主従関係を構築しているのだろうか。伺候者と主人の関係は絶対的なものではなく、特に離反に際しては、苦悩し葛藤する様子が語られている。伺候者が守るべきは主人か自分か、男性伺候者は男性ゆえの苦悩と葛藤があり、女性伺候者は女性ゆえの苦悩と葛藤がある。

本稿では、伺候者たちが抱える、男性ならではの女性ならではの「心」の問題に焦点をあて、その苦悩や葛藤について論じる。

一、「すくすくし」き伊予の介

男性伺候者は、公的な家司や私的な家人などを含め、権勢家と私的主従関係を結び主家の栄枯盛衰の指標として語られる。『源氏物語』において、最初に受領というのが物語にせり出してくるのは、空蝉物語である。空蝉物語は、空蝉という受領の妻と光源氏との交渉を中心に据え、私的主従関係の男性の物語をも抱えながら語られる受領層との恋愛譚である⁽²⁾。空蝉は光源氏に惹かれるものの、中の品の女と上の品の男という身分差に加え、中の品に没落した存在ゆえに葛藤する⁽³⁾。それは、光源氏と一夜を共にした後朝の文脈が示唆的である。

女、身のありさまを思ふに、いとつきなくまばゆき心地して、めでたき御もて
 なしも何ともおぼえず、⁽⁴⁾常はいとすくすくしく心づきなし」と思あなづる伊予
 の方の思やられて、⁽⁵⁾夢にや見ゆらむ」とそら恐ろしくつつまし。

(1) 帚木「一〇三・一〇四頁」(4)

光源氏からの後朝の歌を詠みかけられた空蝉は、「めでたき御もてなしも何ともおぼ

えず」と光源氏のもてなしに感動するよりも、「伊予の方の思やられて」と夫である伊予の介を意識し、そしてそれが夢を媒体として夫の意識下に入り込むことを「そら恐ろしくつまし」と感じている。後朝において目の前の光源氏ではなく「伊予」を気にする空蟬の心は、受領の妻という身意識が第一にあり、自卑として「身のありさまを思ふ」のである。夫である伊予の介に対して「常はいとすくすくしく心づきなし」と思あなづる「空蟬には、かつて宮仕えも志した上の品であったという身意識が大いに働いている。だからこそ、光源氏と接したことで「いとつきなくまばゆき心地」とともに、受領である夫の「すくすくし」という性格を「心づきなし」と不快に感じ「思ひあなづる」のである。「すくすくし」とは、男女ともに用いられ、男性の場合は政治を中心とする社会での実直さ、女性の場合は男女間における生真面目さゆえの愛敬のなさの意として語られる。ここで、空蟬が日ごろ感じている伊予の介の「すくすくし」さは、空蟬にとつてマイナスの要素であったが、政治の社会においては、信頼たる誠実な性格としてプラスの要素として語られる⁽⁵⁾。

従来、ずる賢い、抜け目ないと総括的に捉えられる受領であるが、伊予の介を「すくすくし」き人物として評価し、捉え直したい。

伊予の介といひしは、故院かくれさせ給て又の年、常陸になりて下りしかば、かの帚木もいざなはれにけり。須磨の御旅居もはるかに聞きて、人しれず思ひやりきこえぬにしもあらざりしかど、伝へきこゆべきよすがだになく、筑波嶺の山を吹き越す風も浮きたる心地して、いささかの伝えだになくて年月重なりにけり。

〔関屋〕三五九頁

右記の文は、関屋巻の巻頭であるが、巻頭から受領について語り出すのはこの巻だけである。伊予の介に関する冒頭の一文は、光源氏に対して音信不通であった空蟬の事情「須磨の御旅居も……」以降の一文を導くための序詞的文脈である。そして、物語は空蟬と光源氏の再会を中心に据えつつ、周縁の受領層伺候者たちの姿を語っていく。

この巻頭の語り出しに注目してみると、空蟬の夫は桐壺帝御世で伊予の介を務め、次の朱雀帝御世では常陸の介となつていふことから、よほど時流を見極めて行動する才覚ある人物であるとわかる。かつて伊予の介は、「伊予の介のぼりぬ。まづ急ぎ参れり。舟路のしわざとて、すこし黒みやつれたる旅姿、いとふつつかに心づきなし」(「夕顔」一四五頁)と伊予国より上京した際、旅姿のまま真つ先に光源氏のところへと挨拶に出向いている。「旅姿」であったことは、急いで参上したからとも解釈できるが、直接の私的主従関係であれば正装して参上するのが本来であるから、この場合は、左大臣と伊予の守が私的主従関係にあり、主家のひとりである光源氏への挨拶に「旅姿」で参上したと考えたい。

こうした行動に光源氏は不快感を抱いておらず、むしろ評価している。それは、光源氏からの評価が以前から高いことから窺える。伊予の介への評価は、「いとよしありて気色ばめる」(「帚木」九七頁)、「人もいやしからぬ筋に、容貌などねびたれど、きよげにて、ただならず気色よしづきて」「ものまめやかなる大人」(「夕顔」一四五頁)と優れた風情を身につけた大人であると認識されている。さらに、任国へと下向する際には、光源氏は「手向け心ことにせさせ給」(「夕顔」一九四頁)と饒別まで渡していることから、光源氏の信頼と期待が高いことを示している。伊予の介の「すくすくし」き性格の発露として「よし」があり、光源氏をはじめとする他者が、彼の誠実さ風情を感じることに繋がるかと考えてよいのではないか。

さて、伊予の介が身を置く政治の世界を少し概観する。桐壺帝から朱雀帝への御世代わりは、葵巻で語られるが、実質的にはその翌々年の桐壺院崩御とさらにその翌年の藤壺出家により、物語世界の政治状況は一転する⁽⁶⁾。右大臣方の「御ままになりなん世」(「賢木」九八頁)は、光源氏を含む左大臣方の多くを政治の中心から排除した専制的な政治が行われた⁽⁷⁾。左大臣方から右大臣方へと政権が移行したことで、当然受領層たちにも選択が迫られることになる。受領層の者たちにとって一番の関心事

は、国司を任官する県召除目と京官を任命する司召除目である。桐壺院崩御後すぐの県召除目（崩御翌年の春）の様子は、次のように語られている。

年かへりぬれど、世中いまめかしき事なく静かなり。まして大將殿は、もの憂くて籠りぬ給へり。除目の頃など、院の御時をばさらにも言はず、年ごろ劣るけぢめなくて、御門のわたり、所なく立ち込みたりし馬、車薄らぎて、宿直物の袋をさをさ見えず。親しき家司どもばかり、ことに急ぐ事なげにてあるを見給にも、
（今よりは、かくこそは）と思やられて、ものすさまじくなむ。

（「賢木」一〇〇頁）

国司を任官する除目において、かつて所狭しと押し寄せていた受領たちと主家との過去「御門のわたり、所なく立ち込みたりし馬、車」の様子は、すでに現在には存在しない過去の事態を表わす「き」を用いることで⁽⁸⁾、光源氏の政治的影響力の低迷と驕りを実感のこもった形で示している。そして、それは本来目を向けることのない家司までも光源氏が「見る」ことから分かるように、「今よりは、かくこそは」という未来を見据えた光源氏の暗然たる心の内が語られる。しかも、敢えて「親しき家司」と語るところに、「親しからぬ家司」たちの暗躍が含蓄されていよう。ここでの家司は、いわゆる受領家司で「ことに急ぐ事なげにてある」というのは、来訪者がいなくて対応に急ぐことがないということに加えて、「親しき家司」ゆえ右大臣方に急いで取り入らないということも読み取っていいであろう。受領層の者たちは、上流貴族と私的主従関係を結ぶことによって数少ない関国の地位を求め、そうした者たちへの語りは、物語における時勢をそのまま示している。不特定多数の受領層たち（それ以下も含む）の離合集散は、政治的な物語社会を構築している⁽⁹⁾。

そして、実は、この光源氏が沈淪している様子が語られる除目において、専制的な政治から排除されなかったひとりに伊予の介がいる。彼は「故院かくれさせ給て又の年、常陸になりて」という右大臣方の専制的な政治が行われた時代が強調される文脈

において、国司としての任を得ていることが語られる。しかも、上国、伊予国介から大國、常陸国介へと着実に昇進を遂げている。左大臣政権下でも右大臣政権下でも国守として取り立てられる人物であるということは、権力者に取り入るのが巧みな者か時勢に関わらず有能な者であるかのどちらかであろう。しかし、伊予の介の「すくすくし」き性格やそれに基づく人物評価と働きぶり、左大臣方を排除した右大臣方の専制的政治を考えると、後者である可能性が高い。また、遥任国司ではなく実際に地方へ赴いた伊予の介は、五年もの間在留し、執り行うべき儀礼、報告、管理、引継ぎなど馴れない土地での煩雑な仕事をこなしてきた。大夫の監のような地方豪族もいたであろうし、中央から派遣された国司として地方国をまとめることは、それなりの能力がないと大変であった⁽¹⁰⁾。いずれにせよ、伊予の介という人物を考える上で、両政権下において国司の任を得ていたことを語るこの意味は小さくない。

桐壺院の諒闇が明けた翌年、再び県召除目の話題を持ち出すことで、更に右大臣方の専制的政治力が増していること、左大臣方受領層たちの悲劇が語られる。

司召のころ、この宮の人は給はるべき官も得ず、おほかたの道理にても、宮の御給はりにても、必ずあるべき加階などをだにせずなどして、嘆く類いと多かり。
（「賢木」一三七頁）

「宮の人」は、藤壺に仕える家司であると『玉上評釈』は指摘する⁽¹¹⁾。「おほかたの道理」を無視し、「必ずあるべき加階」もなかった家司たちの様子は悲惨である。周囲の者たち、特に私的主従関係にある者たちの不遇を語ることで、主家の政治的権力の弱体化、物語社会の政治勢力を示している。

時勢に大きく左右されることなく社会を生き抜いた伊予の介であったが、その息子たちは対照的である。実子である紀伊の守、右近の將監、義弟の小君は、受領層ゆえの葛藤が関屋巻では語られている。次に、時勢に翻弄された受領層としての男性同僚者たちが抱える葛藤の内実について見ていきたい。

二、「世に従ふ心」と男性伺候者たちの葛藤

受領層という下流貴族ゆえの苦悩や野心については、夙に阿部秋生氏が、明石の君の物語を取り上げて論じている⁽¹²⁾。しかし、明石一族は、既に鄙に土着し、都の生活は過去のものとして語られ、上流貴族との繋がりがある伺候者という立場からは乖離した存在である。男性伺候者の苦悩と葛藤といえは、関屋巻において他にはないだろう。関屋巻は、短い巻ながら光源氏と空蟬との再会、そして出家による恋愛譚の終焉を語る。しかも、空蟬の出家は光源氏と無関係な語りにおいて果たされるのである。このような短い巻でかつ恋愛の発展もない関屋巻であるが、光源氏の都落ちと復権、しかも復権直後の巻ということ鑑みれば、関屋巻の中心は空蟬との恋愛譚よりも、空蟬を中心とした受領層が抱える苦悩や葛藤といった問題が浮上してこよう。

関屋巻冒頭は、伊予の介、常陸の守という都(中央)と鄙(地方)を行き来する受領への焦点化、須磨・筑波嶺の山・石山・打出の浜・粟田山・関山という地名から語り出すことによって物語のイメージ空間を都の外部へと拡げている。関屋巻で語られるのは、貴族社会に属する都の人間でありながら地方官の職を求め都と鄙を往還する受領層ゆえの苦悩である。

かの昔こきみのこきみ小君こきみ、今いま、右衛門すけの佐すけなるを召めし寄よせて「今日けふの御せき関むか迎むかへは、え思おもひ捨すて給たまはじ」などの給たまふ。御心ごこころの内うち、いとあはれにおぼし出いづること多おほかれど、おほぞうにてかひなし。…「中略」…石山いしより出いで給たまふ御むか迎むかへに右衛門すけの佐すけ参まりてぞ、まかり過すぎしかしこまりなど申ます。昔こきみ、童わらわにていとむつまじうらうたきものにし給たまひしかは、かうぶりなど得えしまで、この御徳ごとくに隠かくれたりしを、おぼえぬ世よの騒さわぎありしころ、ものの間まこえに憚はにかりて常陸ひたちに下くだりしを、少し心こころ置おきて年としころは思おもひしけれど、色いろにも出いだし給たまはず。昔こきみのやうにこそあらねど、なを親したしき家人いへのうちには数かずへたまひけり。紀伊きいの守かみといひしも、

今は、河内かうちの守かみにぞなりにける。その弟せいとうの右近みぎせうとの将監しょうげん解とけて御供ごともに下くだり(し)をぞ、とりわきてなし出いで給たまひければ、それにぞ誰たれも思おもひ知りて、(な)どて少しも世よに従したがふ心こころを使つかひけん)など思おもひ出いでける。

(関屋「三六一・三六二頁」)

「かの昔こきみの小君こきみ、今いま、右衛門すけの佐すけ」と語られる右の文脈では、伊予の介の三人の息子たちの過去と現在について語る。集中的に「昔」の語を多用することで、必然的に「今」との対比を示している。ここで語られる「昔」は、光源氏と空蟬の心情に即して二人の「昔」のことへと遡る意識が働き出す語りであると陣野氏は指摘する⁽¹³⁾。そこには空蟬の「ゆかり」(空蟬「二九頁」)として恋の仲介役であった「昔」の小君と「今」の小君が呼び込まれる。ここでの昔今の境界線は「おぼえぬ世よの騒さわぎ」という須磨退去である。かつての小君は「童わらわにていとむつまじうらうたきもの」として光源氏が常に「まつはす」存在であった⁽¹⁴⁾。にもかかわらず、「ものの間まこえに憚はにかりて常陸ひたちに下くだりし」行動により「心置こころきて」「親したしき家人いへのうち」でしかない「今」は、光源氏と心の距離が開いてしまったことの後悔を浮かび上がらせる⁽¹⁵⁾。小君と光源氏の「今」は、かつてのような関係には戻ることのできない断絶してしまった「昔」を強調している⁽¹⁶⁾。須磨退去に従った右近の将監が「とりわきて」と信頼を得たことを語ることで、右近の将監と光源氏の「昔」もここに呼び込まれる。ここでの「な」どて少しも世よに従したがふ心こころを使つかひけん」という心の叫びは、小君だけではなく「誰も」と一言添えられる光源氏から離反した者たちとの重奏した声と捉えてよいであろう。この文脈で注目したいのは、主家の社会的立場の浮沈に応じて行動した伺候者たちの「世に従ふ心」を批判的に語っていることである。「世」とは認識の主体と他者との関係についての意識を鮮明にする語であり⁽¹⁷⁾、ここでの「世」は権力を中心とする共同体のことを意味し、そうした意識の集合体の動きに「従ふ」のである。したがって、他者との相互関係によって引き起こされる「世に従ふ心」とは、世情のこと

ある。須磨退去に際して光源氏は、「世になびかぬかぎりの人々」(須磨二七六頁)に二条院を任せている。一方で、「おほかたの世に從ふものなれば、昔語りもかきくづすべき人少なうなりゆく」(花散里一五六頁)と昔語りすらできない世情の一般をも理解している。世情と私情、男性伺候者にとつてどちらを優先すべきかは、男性ならではの葛藤である。小君は「世の騒ぎ」における「もの聞こえ」(世情を優先し、光源氏に「従ふ心」)私情を劣後としたのである。かつて光源氏が「いとむつまじうらうたきもの」にし、互いに私情で繋がっていた「昔」は、小君が「かうぶり」を得て「世」と関わりを持ったことで、世情に從う「今」へと変貌してしまつたのである。小君の「なごりも少しも世に從ふ心を使ひけん」という心の叫びは、世情を知りそれを優先してしまつた「今」の後悔を際立たせている。小君については、伺候者を論じる上でとても重要な存在なので、世情と私情、童と大人の「あわい」からの成長物語として別稿で論じる。

私情を表わす語としては、「わたくしの心ざし」ということにならうか。伺候者に関する文脈ではないが、大宮が息子、内大臣の訪れがないことへの不満を光源氏に語つた際の発言に「おほやけ事の繁きにや、わたくしの心ざしの深からぬにや、さしもとぶらひものしはべらず」(「行幸」二九九頁)と朝廷行事や儀式をさす「おほやけ事」とそうしたことから離れた「わたくしの心ざし」の双方を「世」の対構造として持ち出している(18)。また、夕霧が友、柏木を喪い、すぐに弔問できなかった理由を一条御息所に語つた発言では「神わざなどの繁きころほひ、わたくしの心ざしにまかせて、つくづくと籠りみはべらむも例ならぬこと」(柏木三三九頁)と「わたくしの心ざし」を優先できなかった理由に、朝廷行事や儀式と関わる「神わざ」の多忙を挙げている。いずれも、政治中心の社会に身を置く男性を基準とした発言である。公卿ですら世情と私情からなる「世」を生きる葛藤を問題にするのであるから、公卿より社会的立場の弱い伺候者にとつては、私情を優先すべきであつても世情を優先しなければ社会で

生き残つていくことができないという、より複雑な葛藤があることを閑屋巻では示している(19)。そして、こうした男性伺候者たちが抱える問題は、宇治十帖で掘り下げられ、個々の欲望構造が顕在化して語られることになる(20)。

一方、女性伺候者は女官であつても、朝廷行事や儀式に関わる職務のことが問題として語られず、「世情／私情」ではなく、ひとりの主人、ひとりの主家に長く仕えることを良しとする論理が働いているようである。次節は、女性伺候者の苦悩や葛藤がどのように語られているのかを考察し、主人と離反する侍女への語りの回路を明らかにしていく。

三、「まかりあくがる」侍従の葛藤

蓬生巻は、末摘花と光源氏の再会、救済が語られるが、この末摘花物語の面白さは後半にある。宮家への対抗心、姉への復讐心に発する経済中心主義となつた末摘花の叔母の嫌がらせとその敗北の物語は、末摘花の救済性を際立たせる(21)。末摘花の叔母は、「世におちぶれて、受領の北の方」(蓬生三三三頁)になつた大宰の大貳の北の方で、かつての姉への復讐心から、末摘花を何とかして自分の娘の侍女にしようとするが失敗する。しかし、結果的に末摘花の乳母子(侍女)である侍従を奪取することで、一矢報いたとも言える。予定調和としての物語(継子いじめ譚と同型)であるが、この叔母の存在を通して女性伺候者の問題が浮かび上がってくる。それは、巻末に端的に示されている。

蓬生巻末は、主家のもとを離反した侍女への痛烈なまでの批判、しかも語り手が物語世界を背後へ押しやり、その身体を前面に出しての批判で締めくくられる。こうした語り手の姿は、『源氏物語』においてこゝだけである。

かの大貳の北の方、上りて驚き思へるさま、侍従がうれしきもの、いまし

ばし待ちきこえざりける心浅さを恥づかしう思へるほどなどを、いますこし問はず語りもせましけれど、いと頭痛う、うるさくもの憂ければなむ、いままたもついであらむ折に思出でて、聞こゆべきとぞ。(「蓬生」三五五頁)

ここでは、叔母と侍従が去った末摘花物語の後日談として、右記の一文が添えられている。語り手が「いと頭痛う、うるさくもの憂ければなむ」と己の身体性を持ち出し「問はず語り」を中断したのはなぜだろうか。その中心にあるのは、「侍従がうれしきものの、いましばし待ちきこえざりける心浅さを恥づかしう思へるほど」という侍従の葛藤ではないか。光源氏に救済された主家を思えば「うれし」という感情が、しかし侍女としての己を省みれば「恥づかし」という複雑な侍従者の心情が語られている。ここまで、末摘花、叔母、侍従を取り巻く人間模様を語ってきた語り手にとって、侍従の判断を「心浅さ」と非難し、これ以上受領層の苦悩や葛藤を語ることは肉体的にも(「頭いたし」)精神的にも(「うるさし」)疲弊することだと語りの中の断を弁明している。こうした女性侍従者の抱える葛藤への「問はず語り」が、肉体的エネルギーをいかに伴うということがよくわかる(22)。しかし、この巻末文があるからこそ離反する女性侍従者たちの、語られないが確実にそこにある苦悩と葛藤を示している。ここで語り手によって、その行動が批判された侍従の葛藤が生み出される語りのメカニズムを明らかにしたい。前節の最後で女性侍従者は、ひとりの主人、ひとりの主家に長く仕えることを良しとする論理が働いていることではないかと問題提起したが、侍従は末摘花の乳母子としてこれまで「年ごろ、あくがれ果てぬ者」(「蓬生」三三三頁)、「年ごろ、わびつつも行き離れざりつる人」(三四二頁)と「年ごろ」離反せず仕えていることが高く評価されていた。しかし、叔母の計略の一部として「大式の甥だつ人語らひつきて、留むべくもあらざりければ」(「蓬生」三三五頁)と、大式一族の一員として取り込まれたことで、自分の意思とは無関係に離反することとなる。

「語らひつく」は一種の婚姻関係を意味するが、ここでは主従関係よりも優先される

関係であることがわかる。離反の理由は「おぼえぬ道に誘はれて、遙かにまかりあくがること」(「蓬生」三四二頁)と侍従自身が語っている。ここでの「まかる」は、主人を目の前にし「おぼえぬ道」へ行くことを謙譲の態度として示す。そこに付与される「あくがる」は、心や身が何ものかに引きつけられて、あるべき場所を離れて浮き立ってゆく、放心の態を結果的には導き出す心のさまで(23)、己の力ではどうすることも出来ない無力感が述べられている。この「まかる」と「あくがる」の複合語「まかりあくがる」という表現は、『源氏物語』においてはここでしか用いられておらず、本来は離反するはずもない侍女の離反を語る独特の様態を示している。

離別に際しては、「年経ぬるし」(三四二頁)としての贈り物と、異例とも言える主人からの贈歌が語られる。ふたりの贈答では「玉かづら」を共通歌語として「ずつと共に」という意識の交換、共有が中軸に据えられている。しかし、「頼みし玉かづら」と永遠を信じていた過去を言う末摘花に対して、侍従は「玉かづら絶えてもやまじ」と離別後の未来を口にする。両者にとっての「玉かづら」という共通歌語は、もはやことばの共有でしかない。離別していく事実が変わらず、二人の関係が変化するわけでもない。贈答によって場の連帯を演出するものの、そこには既に相容れない侍従者と主人の感情が横たわっていることを示している(24)。さらに、乳母の遺言(侍従の母)を持ち出し泣く末摘花の姿は、いかに侍従のことを信頼していたか、離れたくないかがことばを尽くして示されている。乳母(まま)の遺言を持ち出すことで、ここには、養君と一生を共にするという乳母子の姿に加え、それらを包括する形で、長年仕えた侍女との分かち難い別れを語っている。侍従が去った後、末摘花は侍従のことを「はかなきことを聞こえ慰め、泣きみ笑ひみ紛らはしつる人」(三四三頁)と悲しみと喜びを共有し心を慰撫してくれた侍女であったとその存在の大きさを改めて痛感している。

つまり、蓬生巻における末摘花と侍従の物語は、侍女がひとりの主人に長年仕える

ことで生じる主従の心の融和とそれゆえの葛藤を、離反を通して示している。そこには、身分差から生じる心情の優位性は無化されている。そして、離れていくのはいつも伺候者の方で、実は心を痛めるのは他へ移ることが容易に叶わない残される主人なのである。だからこそ、「年ころ」仕えた侍女の離反に対しては、蓬生卷末のような痛烈な批判を物語は用意したのであろう(25)。

四、「まかで散らぬ」女性伺候者たちの葛藤

離反する女性伺候者の姿は、個人よりも集団としてごく自然な共同体の動きとして語られ、多くは「まかで散る」という表現で語られる。「まかづ」は、ただ去るのとは異なり、一時的なり永年なり主家との関係を断ち切ることを許されて去るのである。それゆえ、その表現の背後には「まかづ」ことを打診してきた伺候者とそれを許可した主人とのやりとりをも含みもつことを忘れてはいけない。

政争に負けた八の宮に従い、ともに宇治で暮らしていた北の方は、中の君を出産後亡くなる。それを機に多くの侍女が邸を去っていくさまは次のように語られる。

「上略」……かなはぬ事多く、年月に添へて、宮の内もさびしくのみなりまさる。さぶらひし人も、たづきななき心地するに、え忍びあへず、次々に従ひてまかで散りつつ、若君の御乳母も、さる騒ぎに、はかばかしき人をしも選りあへたまはざりければ、ほどにつけたる心浅さにて、幼きほどを見棄てたてまつりにければ、ただ宮ぞはぐくみたまふ。(橋姫「一二〇頁」)

侍女たちが「次々に従ひてまかで散る」理由として、「たづきななし」と語られている。「たづきななし」とは、経済的困窮による不如意な状態を意味し、かつての大臣家の娘であった北の方が八の宮家の経済を支えていたことが分かる。侍女たちは、自己を犠牲にしてまで主家の繁栄を願うよりも、自己の利益を優先して伺候先を選び主家を替

える。ここでは、「たづきななき心地」を訴え「まかで散る」侍女たちの正当性と、彼女たちを留める経済力も統率力もこのときの八の宮にはなかったことが語られる。主家の繁栄を第一に考え行動している侍女は、乳母や乳母子、主家との血縁者、長年伺候しているなど主家との深い繋がりのある特別な者たちだけなのである。しかし、ここでは責任が重いはずの乳母までもが若い養君を見棄て離反している(26)。この時の八の宮邸のことを、「身を捨てがたく思ふかぎりは、ほどほどにつけて、まかで散り、昔の古き筋なる人も、多く見たてまつり棄てたるあたり」(総角「二三八頁」と弁の君は語る。この「身を捨て」る覚悟ある者だけが主家に留まり居残るのである。そしてここでは、古参の侍女(昔の古き筋なる人)も離反したことが「見たてまつり棄つ」という特殊な表現で語られている。「棄つ」は、無用・無価値なものとして手放すことで、主家として「見たてまつる」ことを放棄するのである。ここでは「見たてまつり棄つ」主体である古参の侍女に優位性があり、主家はそれを制止する力が及ばないという主と従の逆転の関係性が見て取れる。

しかし、侍女の離反を語る「まかで散る」「見たてまつり棄つ」も宇治の物語空間においてのみ機能し、都とは異なる空間における侍女たちの姿を語っている。実は、正編における「まかで散る」「見たてまつり棄つ」は、全て打消表現ないし否定表現を伴い、主人を見棄てない、離反しない侍女の姿とともに、それを喜ぶ主家の主従関係の理想性を示す表現として用いられている。たとえば、須磨退去では、光源氏に仕えていた侍女たちは紫の上のもとへと移され、離反しなかった理由が次のように語られている。

東の対にさぶらひし人々も、みな渡り参りし初めは、へなどかさしもあらむ(む)と思ひしかど、見たてまつり馴るるままに、なつかしうをかしき御ありさま、まめやかなる御心ばへも思ひやり深うあはれなれば、まかで散るもなし。

(須磨「二〇七頁」)

光源氏の侍女たちは、あくまで光源氏の侍女であつて同じ邸内でも紫の上との交渉は皆無であつた。だからこそ、「なかさしもあらむ」と主人として侮るのである。しかし、紫の上を「見たてまつる」ことに馴れるにしたがつて、主人とすべき「御ありさま」「御心ばへ」に「あはれ」を感じ、結果「まかで散るもなし」となる。逆に言えば、侍女たちが「あはれ」を感じなければ、自分たちの主人として相応しくないと判断を下し、離反していたことを示している。「まかで散る」主体はあくまで侍女たちにあり、そこでの主家や主人の思いや考えは語られず、「まかで散る」か否かは侍女の心ひとつなのである。さらに、主家の浮沈に関わらず長年「まかで散らざりける」侍女は「幸ひ人」として語られている(27)。

「上略」：年ごろ思し沈みつるなごりなきまで栄へ給ふ。なを昔に御心ばへ変らず折ふしごとくに渡り給などしつづ、若君の御乳母たち、さらぬ人々も、年ごろのほどまかで散らざりけるは、皆さるべきことに触れつづ、よすがつけむことを伺候者の「年ごろ」が重要視されている。「よすがつけむこと」とは、具体的には、『玉上評釈』が指摘するように「生活がゆたかになるように、たとえば地方長官と結婚させたり、その子に職を与えたり、その主人を有力者の家司に推したり」するのである(28)。

「まかで散る」侍女たちは、主家の経済状況および伺候する主人の人物を見て、離反するか否かを決定していく。それは、とても辛辣な外部からの評価である。また、「まかで散る」の類語表現として「行き散る」というものがある。謙譲表現ではないことから、「まかで散る」に比べ主従関係は希薄で、侍女主体の主家への見限り要素が強い。これは主に経済的不遇にある主家での伺候を望まない者たちが、よ

りよい伺候先をもとめ自己利益のために離反していくことを語る際に用いられる(29)。末摘花の困窮を語る文脈では「みな次々に従ひて行き散りぬ」(「蓬生」三二七頁)と周囲の侍女の判断に従つて離反することが語られる。しかし、光源氏の庇護を受けるようになったことを知ると、「なま受領などやうの家にある人」は「うちつけの心見えに参り帰る」(「蓬生」三五四頁)のである。「参り帰る」理由として「馴らはずはしたなき心地」という侍女たちの心によるものが語られている。そこには、新しい主家が「なま受領」よりも仕えるに相応しい家格であったり、「はしたなき心地」がしなかつたりすれば、「参り帰る」ことがないことも示していよう。まさに「うちつけの心」次第で主家を替える侍女たちの姿である。ほかに、寂れた宇治の邸に住む中の君のもとへ匂宮が通うようになり、将来への期待が高まる侍女たちは、「京に、さるべき所々に行散りたるむすめども、姪だつ人三三人尋ね寄せて参らせたり」(「総角」二八七頁)と身内の者たちへも利に与らせようと参上させる侍女たちの姿も語られる。しかし、このように自己利益をもとめ伺候先を替えていくことができる侍女は前掲のように縁故があるか、侍女としての能力が高い一部の者に限られる。そうでない場合には、伺候先を替えることができず「女ばらの命絶えぬもありて」(「蓬生」三二七頁)とそのまま人生を終えることもある。侍女たちにとって伺候先は、決して憧れや嫉妬の対象だけではなく、彼女たちが生きる「世」の問題としてある。

女性伺候者たちにとつての「世」は、主家を中心とする主従の社会であり、さらに主家を取り巻く他家との共生の社会である。共生の社会を生きるためには、情報が大なる価値を持つ。だからこそ、「世の人」「人」を代表する女性伺候者たちは、他者の情報を収集し発信することで噂の中心となるのである(30)。日常的に噂の渦中にある女性伺候者たちは、噂をもとに共生の社会を巨り歩くのである。

そうした集団としての女性伺候者を語る一方で、物語は主人と女性伺候者の関係を経済面ではなく、心の紐帯を大切にすることを理想とする。ひとりの主人、ひとりの

主家に伺候することの理想性を、離反する女性伺候者たちの姿で語るのである。また、主家の盛衰に応じて、自己利益を中心に据えた離合集散する女性伺候者たちの姿は、心ひとつで離れることができない主人の辛さをも逆照射する。

五、伺候者たちへの視線

蓬生巻では、末摘花の叔母が末摘花を娘の侍女にしようとする物語の挿話として、光源氏が赦免され都へ帰京することが語られる。

さるほどに、げに世中に赦され給ひて、「都に帰り給」と雨の下したのよるこびにて立ち騒ぐ。(我もいかで人より先に深き心ざしを御覽ぜられん)とのみ思ひきををふ男女につけて、高きをも下れるをも、人の心ばへを見たまふに、あはれに思し知るおもししことさまさまなり。(「蓬生」三三四頁)

光源氏が「人の心ばへ」を目の当たりにし、「あはれ」を思い知る場面である。「我もいかで人より先に深き心ざしを御覽ぜられん」との自己利益を丸出しにする者たちの姿である。「男女につけて、高きをも下れる」者とは、伺候者たちのことである。ここの「男女」は男性伺候者と女性伺候者であろう。その中でも「高きをも下れるをも」と「高き」者は受領層の者たちで、「下れる」者は受領層よりも下位の下人たちであろう。そうした伺候者たちが光源氏のもとへと集まってきたのである。光源氏は、男性社会を生きたが、女性伺候者も寄って来るところが興味深い。紫の上の侍女として取り立ててもらおうということなのであるか。かつて都を去るにあたっては、世情に従って人々が自分の周囲から離れていくさまに「世中いとわづらはしくはしたなき」(須磨「一六一頁」と感じていたが、帰京後の「人の心ばへ」には一層辟易したことであろう。

こうした「世に従ふ」者たちへの視線は、息子、夕霧が元服することばが示唆

的である。息子を、蔭位による四位ではなく六位とし、かつ「大学の道にしばし習はさむの本意」(「少女」二二頁)を光源氏が語る文脈には、須磨退去前後で心を痛めたであろう人間関係の哀愁を感じざるをえない。

戯れ遊びを好み、心のままなる官爵にのぼりぬれば、時に従ふ世人の、下には鼻まじろきをしつつ、追従し、気色とりつつ従ふほどは、をのづから人とおぼえて(やむごと)なきやうなれど、時移り、さるべき人に立ちおくれ、世衰ふる末には、人に軽め侮らるるに、とるところなきことになむ侍。(「少女」二二頁)

帝の子として誕生し、臣籍降下するものの左大臣家の婿として権勢を誇り、須磨退去によつてすべてを失い、そして再び中央政權へと戻ってきた光源氏だからこそその発言である。ここからは、光源氏の人間関係に基づく政治観、官職などの外面的なもの脆さ、世を生きたる上での大切にすべきものへの思いが滲み出ている。この前後の文脈、光源氏の発言では「世」という表現が六回も集中的に出てくる。光源氏は「世」ということが社会において重要であると強く認識しており、それはこれまでの経験にもとづく他者との関係性が収斂し意識化した発言である。光源氏の周囲にいる「時に従ふ世人」の内面には、「鼻まじろき」「追従」「気色とりつつ従ふ」心があると語気を荒げている。「鼻まじろき」は鼻をひつくかせながら相手を嘲笑する身体表現で、ここにしか使われない表現だけに光源氏の隠された憤りやそれに耐えてきた姿が読み取れよう。

ここでは、「時に従ふ」「世に従ふ」伺候者たちに圍繞されてきた主家の側から、伺候者たちの時勢や世情に従う者たちに「軽め侮らるる」怖さを語っている。「時に従ふ」「世に従ふ」伺候者たちが示す時勢や世情に対して、主人たちは常に受動的な立場でしかないのである。

では、主人側から女性伺候者への視線はどうであろうか。予期せぬ外腹の娘、近江

の君の処遇に困り、弘徽殿女御の侍女にしようと考えた内大臣の発言が参考になる。

なべての仕うまつり人こそ、とあるもかかるも、をのつから立ちまじらひて、人の耳をも目をも必ずしも留めぬものなれば、心やすかべかめれ。

(「常夏」二四四頁)

「なべて」という表現からわかるように、ここでは女性伺候者を総じた形で述べている。侍女は相当数が仕えることも相まって「人の耳をも目をも必ずしも留めぬもの」という誰の目にも耳にも留まらない存在であると言う。この発言の裏には、内大臣の近江の君の特異な性格を侍女集団で無化したいとの思惑もあるが、主人側が女性伺候者をどのように捉えているかを知る参考にはなる。

主人側から伺候者への視線は、集団としての「人の心ばへ」の恐ろしさのようなものが感じられよう。伺候者たちの動向は、主人を取り巻く「世」を目に見える形で示している。

おわりに

『源氏物語』は、伺候者と主人の繋がりをモノで語らない。語るのは、互いの心である。したがって、離別や離反に際しては、主従それぞれの葛藤が見られるのである。特に、男性伺候者は「世情／私情」という葛藤を抱え、主人もそうした思いと向き合いながら主従という人間関係を構築していることがわかる。

伺候者の辞去や伺候を拒絶する主人の姿は語られない。そこには、主家を去るのも仕えるのも、実は伺候者側の心にあることが透けて見えよう。伺候者が主家を離反することへの葛藤にことばを尽くして語るのは蓬生巻である。そこには、ひとりの主家、主人に長く仕えることを良しとする物語の思想があり、だからこそ逸脱する侍女を語り手は厳しく非難するのである。

伺候者たちの離合集散の動向は、主家の浮沈の側面を強調する語りとして、物語社会の「世」を突きつける。それは、主人たちが己の言動、行動を見つめる伺候者たちに、常に見られているという緊張感のもとにあることを意識させる。伺候者と主家、主人との関係には身分差はあるものの、常に緊張関係の上に成り立っているのである。伺候者と主家の間にある緊張関係の問題は、蓬生巻から次の関屋巻へと引き継がれて語られる。女性伺候者への語りで終わる蓬生巻と男性伺候者への語りで始まる関屋巻には連続性が認められ、伺候者と主家の緊張関係というテーマをもつ物語として評価すべきであろう。今後は、伺候者が主人に対して「うるさし」や「わづらはし」「いぶせし」という不快感を口にすることから見えてくる関係性を解き明かしていきたい。

注

(1) 本稿で使用する伺候者とは、特に私的主従関係にある従者を意味して使用する。性別による役割の別がある場合には男性伺候者、女性伺候者と使い分ける。また、伺候者にとって仕える特定の人物を主人、主人を含む一族集団を主家として論じる(たとえば、惟光にとって光源氏は主人、桐壺帝や左大臣は主家である)。

(2) 私的主従関係の男性の物語とは、光源氏を主家とする伊予の介(父)、紀伊の守(実子)、右近の将監(実子)、小君(継子)の物語のことを指す。また、空蟬物語は、光源氏を中心として空蟬は受領の妻ゆえ、伊予の介以下男性陣は受領伺候者ゆえの受領と主家の思惑が交錯する物語である。

(3) 今井久代「空蟬物語の「出会い」ということ」『源氏物語構造論——作中人物の動態をめぐって』風間書房、平成十三年。

(4) 『源氏物語』の本文引用は、「帚木」「橘姫」は明融本(『東海大学蔵 桃園文庫 影印叢書』東海大学出版会、平成二年)、それ以外の巻は大島本(『大島本源

氏物語』角川書店、平成八年)に依り、心内表現は(へ)、発話表現は「」、傍記は()とし、私に改めた箇所は傍記を施した。また、便宜を図り、()内には、新編日本古典文学全集の巻名・頁数を記した。

(5) 「すくすくし」の語は十六例あり、夕霧の性格として四例用いられるのが最多で、光源氏は夕霧に対し「中将などをば、すくすくしきおほやけ人にしなしてん」(「初音」一六〇頁)と社会において「すくすくしきおほやけ人」を理想の姿であると口にしてしている。逆に女性の「すくすくし」は、光源氏が葵の上との心の距離を感じる際の表現として語られる(「葵」二六頁、「若菜下」二〇九頁)。

(6) 高橋麻織「桐壺院の〈院政〉確立―後三条朝の史実から―」『源氏物語の政治学―史実・准拠・歴史物語―』笠間書院、平成二十八年。

(7) 湯浅幸代「朱雀朝の「撰関政治」―撰政と母后の位相・関係性から―」『源氏物語の史的意識と方法』新典社、平成三十年。

(8) 小田勝『実例詳解 古典文法総覧』和泉書院、平成二十七年。

(9) 安藤徹「はじめに」『源氏物語と物語社会』森話社、平成十八年。

(10) 森公章『平安時代の国司の赴任 「時範記」を読む』臨川書店、平成二十八年。
美川圭『公卿会議―論戦する宮廷貴族たち』中公新書、平成三十年。

(11) 『源氏物語評釈』第二巻、角川書店。六〇四頁。

(12) 阿部秋生「明石の君の物語の構造とその解釋」『源氏物語研究序説 下』東京大学出版会、昭和三十四年。

(13) 陣野英則『源氏物語』の作られた「語り」―「関屋」巻を例に―「日本文学」第六十六巻四号、平成二十九年四月。

(14) 光源氏は空蟬との手引きのために、小君を「まつはず」行動を取っていることが繰り返し語られていた(「帚木」一〇八頁、一〇九頁、「空蟬」一一七頁、一一八頁)。

光源氏と小君との関係性を示す重要な表現である。

(15) ここでの後悔は、恩顧による「官職」の便宜ではなく、「心」の距離であろう。

「官職」という観点では、小君は衛門佐、紀伊の守は河内の守、右近の将監は鞍負の尉(「松風」四一七頁)として、官職を得ている。また、須磨退去に従った右近の将監が「とりわきてなし出で給ひけれ」と語られるが、右近の将監から鞍負の尉へは「とりわきて」という程ではないことは、吉海直人氏、高田信敬氏が論じている(吉海直人「右近の将監」『源氏物語の新考察―人物と表現の虚実―』おうふう、平成十五年。高田信敬「蔵人より今年かうぶり得たる―巡爵の話―」『源氏物語考証稿』武蔵野書院、平成二十二年)。

(16) 西郷信綱「神話と国家」『西郷信綱著作集』第三巻、平凡社、平成二十三年。

(17) 高木和子「物語の「世」について」『源氏物語の思考』風間書房、平成十四年。

(18) 安藤徹氏は、「おほやけ」+「わたくし」=「世」(みずからが生きる社会)であり、こうした対関係を押し出し、そこにどうにもならない嘆きの伝達を指摘している(安藤徹『源氏物語』の潜在能力―物語社会における「おほやけ／わたくし」と公共性―「日本文学」第六十八巻第一号、平成三十一年一月)。物語社会の「世」を「おほやけ／わたくし」で捉え直す卓論。

(19) 因みに、右近の将監は私情を優先したために「とりわきてなし出で」たわけではない。葵巻で語られる齋院御禊というハレの場において、勅許を得て光源氏の隨身となったこと(「葵」二四頁)で光源氏方と見なされ、政治状況が一転した際に「御簡削られ、官もとられて、はしたなければ、御供に参る中なり」(「須磨」一八〇頁)と語られている。「はしたなし」という感情は、他者との格差を痛感し、その場から逃げ去りたくなるような心の状態である。彼の須磨随行の理由は、社会的地位の剥奪による都からの逃走である。しかし、光源氏はその心の内を認識していない。

(20) 神田龍身「薫をめぐる端役たち 「後見」「しるべ」という黒衣的欲望」『端役

で光る源氏物語』久保朝孝・外山敦子編、世界思想社、平成二十一年。

- (21) 松岡智之「距離」と「遅延」がもたらすもの―瀧標・蓬生・関屋―『新時代への源氏学2』助川幸逸郎・土方洋一・松岡智之・立石和弘編、竹林舎、平成二十六年。

- (22) 永井和子「問はず語り」の場としての『源氏物語』―非礼なる伝達―『源氏物語へ源氏物語から』笠間書院、平成十九年。

- (23) 高橋文二「あくがるる心」と鎮魂―『王朝まどろみ論』笠間書院、平成七年。

- (24) 鈴木日出男『源氏物語』の和歌―『古代和歌史論』東京大学出版会、平成二年。

- (25) 蓬生巻末の批判に関しては、主人である末摘花とは離れたところで批判されるところに乳母の倫理観を重視する論理が働いているとの吉海直人氏の指摘はそのとおりであろう(吉海直人「末摘花の乳母達」『平安朝の乳母達―『源氏物語』への階梯』世界思想社、平成七年)。侍従は、乳母子という侍女の中でも特に主人との繋がり深い特殊な侍女であるが、本稿では、例外的なものではなく、離反する侍女の範疇として論じた。

- (26) 但し、ここでは従来の乳母とは異なる「はかばかしき人(あはたしきひと)をしも選りあへたまはざり」「心浅さ」という側面が強調されている。

- (27) 原岡文子は、「幸ひ人」を、「幸運や幸福を支える血の滲む努力を重ねる、幸福で不幸な存在」と述べる(原岡文子「幸い人中の君」『源氏物語 両義の糸 人物・表現をめぐって』有精堂出版、平成三年)。瀧標巻での長年「まかで散ら」ない侍女も原岡氏の指摘通り、苦難の末に幸運を掴み取った存在としての「幸ひ人」としての側面を持っていると考えられよう。

- (28) 『源氏物語評釈』第三卷、角川書店。二七三頁。

- (29) こうした自己利益で行動する侍女は大人であり、社会経験の乏しい童には判断ができないらしい。須磨退去で紫の上のもとにいる若い童を見たときに「年月

経は、かかる人々しも、え知りありはてでや行き散らむなど」(須磨一七二頁)と光源氏が感じていることが語られる。

- (30) 安藤徹「物語とへうわき」(注9前掲書所収)

【付記】本稿は、平成三十年中古文学会度春季大会(於・日本大学)における口頭発表の一部から派生した問題を加筆・修正したものです。発表の席上、および前後にご意見ご教示いただいた諸氏に、記して深く感謝申し上げます。

国文学科 講師(日本古典文学【中古文】)